

農閑期の仕事と楽しみ

登醸造 小西 淳子



みなさん、こんにちは。私は北海道余市町で果樹園とワイナリーを経営しています。二〇一一年に夫とともに新規就農し、丸一〇年が過ぎました。これから四回にわたり、日々の農作業やワインづくり、地域のことなどを書いていきたいと思えます。よろしくお願ひ致します。

ワイナリーとライター業

私が農作業を始めるのは四月からです。一月中旬に醸造用ブドウの剪定が終わり、それから三月いっぱいまでは農閑期です。夏場よりゆっくりする時間はありますが、それでもいろいろな仕事があります。

農閑期の一番の仕事はワイナリーの作業です。前年の秋に瓶詰めまで終えていて、それにスズのキャップシールを付けてラベルを貼ります。母屋の和室二間を改装した小さなワイナリーなので製造本数も少なく、機器はほぼ手動でまさに家内制手工業です。三月初旬の発売に向け

て夫婦でせっせと作業します。私は細かいことが気になり作業が遅いタイプ。夫はスピード重視で細かいことはあまり気にしないタイプ。一緒に作業するのだからケンカになります。でもワインの責任者は夫なので、心の中では反論しつつもスピードアップに努めています。

ワインを三月初旬に発売する理由はいくつかあります。一つは農作業が始まる前に出荷してしまいたいということです。もう一つは、うちのワインはロゼワインで、春や桜を連想させる色をしているのでこの時期に発売します。また、ワインを「セツナウタ」と名付けており、進学や就職などで新たな世界へ旅立つ家族や友人、恋人など大切な人とのせつない別れの宴で、ぜひうちのワインを飲んでもらいたいという思いがあるからです。

昨年の三月は新型コロナウイルスの感染が本格化する前で、ワインの販売に大きな打撃を受けずに済みました。今年はかなり心配でしたが、酒屋に案内を出すのと昨年と同じかそれ以上の注文をいた



3月に発売した「セツノウタ2019」

きました。コロナで大変な中でも注文してくれる酒屋は本当に頼もしく、ありがたいです。このまま順調にワインが売れてくれることを祈るばかりです。

ワイナリーの作業の他に、就農前に勤めていた会社から仕事をもらい、ライター業もしています。農業雑誌などで農家に取材に行くのですが、いろいろなことに挑戦している人たちの話を聞くのは楽しく、刺激を受けます。自分の経営や生活の課題を解決するヒントをもらえること

もあります。原稿締め切り前はいつも大変なことになりますが、苦しみながらもかれこれ二〇年以上続けてきた仕事なので、冬場に細々とでも続けていけたらと思っています。

羊の世話

仕事とは言えませんが、この時期毎日行う作業に羊の世話があります。夏場はブルーンと栗の畑に放牧しているのほ

んど手が掛かりませんが、冬場は乾草や穀物の給与、畜舎の除ふん、畜舎がビニールハウスなのでハウス周りの除雪などを行います。もともと醸造用ブドウの下草を食べさせる目的で飼いだめたのですが、ブドウの芽

や実を食べてしまうことが分かり、今はほぼペットになっています。

冬場の牧草代を稼いでもらおうと、繁殖をして子羊を販売しています。九年前、私が子羊を購入したときは一頭三万〜五万円だったのですが、それから価格が上がり今は安くて五万円です。一頭産んでくれれば餌代と種付代を十分カバーできるので、羊たちも大きな顔をして暮らしています。

現在、母羊を三頭飼っていて、今年は

小西 淳子 さん

1974年愛知県生まれ。

大学院卒業後、酪農専門雑誌の記者として働く。

2011年に夫と共に北海道余市町で新規就農。

醸造用ブドウ1.9ha、サクランボやプラムなどの果樹0.3haを生産する。

2014年にワイナリー「登醸造」を立ち上げ、ワインの製造・販売を開始。

夫と猫1匹、羊3頭とともに暮らす。



二頭が妊娠。三月初旬に一頭が双子を産みました。この原稿が掲載される頃にはもう一頭も出産していると思います。毎年二〜三月が出産シーズンです。子羊は雄なら肉に、雌なら運が良ければ繁殖雌羊、そうではなければやはり肉になります。うちは離乳するまで三カ月ほど飼育し、近隣の農家に出荷します。その後、ほとんどは一歳未満で屠畜され、ラム肉になります。

羊が妊娠しているのかどうか、初めは見分けることができませんでした。おなかが大きくなっていくように見えても、実は毛が伸びているだけだったり、太っているだけだったりします。分娩に備えて穀物の給与量を増やしたら、結局産まずに太っただけということもありました。最近乳の張りを見るのが一番確実であることが分かり、分娩一カ月前くらいになれば見分けられるようになりました。分娩の兆候を見分けるのは、さらに難しいです。クフーツと苦しそうな息をしているのでそろそろかなと思いい、夜間も

パトロールをしてスタンバイしていると産まれません。逆に、まだかと思って気を抜いたら、明け方に産まれていたというのはよくあることです。羊はほとんどが安産で、立ち会わなくても大丈夫なことが多いのですが、たまに逆子などで難産になることもあります。そういう場合は人間が引っ張ったりして介助します。また、初産の母羊は授乳を嫌がることがあり、子羊が初乳を飲めるように人間がサポートしなくてはいけないときもあります。分娩は危険が伴うので不安な面もありますが、生まれた子羊はとてもかわいく、農場がにぎやかになるので楽しみにしています。

コロナに負けず女性部活動

農閑期の楽しみの一つに、JAよいち女性部の活動があります。例年ならこの時期は新年会や総会のほか、月に二〜三回例会を開き、温泉に行ったり、料理や手芸をしたりして交流します。しかし、

今年はコロナのために集まることができず、寂しい限りでした。そんな中でも情報交換する方法はないかと考え、部員に近況などをメッセージカードに書いてもらい、それを通信にまとめて配布しました。自分で作ったマスクの写真、過去の女性部活動や楽しかった旅行の思い出の写真などをメッセージに添えてくれる部員もいて、部員の近況や思いが伝わる通信になりました。

また、愛媛県で始まったコロナによる偏見をなくすための活動「シトラスリボンプロジェクト」にも取り組みました。



お気に入りのバックに付けたシトラスリボン

道内の他の女性部が取り組んでいるという新聞記事を見たことがきっかけです。愛媛特産の柑橘にちなんでシトラス色のリボンを作り、それを身に付けてプロジェクトへの賛同の意思を示します。部員みんなが集まることはできないので、役員が感染対策をした上で集まりリボンを作りました。裁縫が大の苦手でボタン付けくらいしかしない私は、正直あまり戦力になっていませんでした。他のメンバーの頑張りで、四日間で五六〇個作ることができました。JAはもちろん、漁協や役場、郵便局などがプロジェクトに賛同してくれ、作ったりリボンを贈りました。余市町がプロジェクトの趣旨にあるような、たとえコロナに感染したとしても、誰もが地域で笑顔を取り戻せる町であってほしいと思います。

自家用の漬物やみそづくりに

自家用の漬物やみそを作るのもこの時期です。漬物は大根の玄米漬けを作りま

す。私は新規就農した女性などをつくる「のぼりんぐ」というグループに所属しており、そのメンバーに作り方を教わり、毎年漬けるようになりました。土間で保管していたら寒すぎて凍ってしまったりと失敗もありますが、一応、夫がおいしいと言って食べてくれる漬物ができています。

みそも「のぼりんぐ」メンバーと一緒に町の加工施設を借りて作り始めました。私を作るみそは味はおいしくできているのですが、熟成中に表面にカビが生える



今年作ったみそ

問題がありました。そこで、今年はみそを販売している隣の農家で一緒に作業をさせてもらい、カビが生えない作り方を習いました。焼酎を使うことと、樽に直接詰めずに漬物袋の中に詰め、空気が入らないようびっちり密閉することがポイントだと教えてもらいました。これからはカビに悩まされず、おいしいみそを食べられそうです。

☆ ☆ ☆ ☆

夫は私より一足先に農作業を始め、三月中旬からサクランボやプルーンなどの剪定をしています。私に加わるのは醸造用ブドウの作業から。醸造用ブドウは地面に寝かせ、雪の中で冬を越すので、作業は雪解けを待ってスタートします。昨年は醸造用ブドウが大豊作でしたが、今年はどうなるのでしょうか。一〇年間農業をしてきて、「すごく良くなくていい。普通の年であってくれれば」と願う自分がいます。